

未来に残したい草原の里１００選

―共創資産を次の世代につなぐ―

未来に残したい草原の里 100 選 運営委員会



茅葺屋根材料にするためのヨシ刈り：草原の里「北上川河口域のヨシ原」

草原が支えた日本のくらし

茅を使った建築物は縄文時代から使われはじめ、農耕が始まると、草原はより積極的に使われるようになりました。使役牛や馬の飼料、茅葺き屋根の材料、ワラビやセンブリなどの食物や薬草など、多くの恵みをもたらしました。秋の七草を愛で、盆に草花を備える心情は、草原とともに醸成された文化です。

生活に必要な草原を維持するために、利用のきまりや野焼きの技術が各地で生まれ、引き継がれてきました。草原への働きかけを繰り返し、草原とともに生きてきた歴史の中で形作られた技術や知恵は、地域特有の「共創資産」です。その資産は、持続可能な社会を実現しようとする私たちにとっても、欠かせないものであることが分かってきました。

いま、草原は国土の１％未満に激減し、文化や知恵までも失われようとしています。人々の想いを共有し、共創資産を次世代へ受け継ぐため、「草原の里 100 選」を選定します。

暮らしを支え、豊かにするもの

—— 草原の里が持つ「共創資産」

地域における草原と向き合い方は、地域から草原への働きかけと、草原からのフィードバックの繰り返しによって、経験的に紡がれてきたものです。地域に蓄積された知識・意識・技術こそが草原の里が持つ価値「共創資産」と捉えました。
草原の里に残る「共創資産」を日本全体で共有し、活用していくことで、次世代に希望のある自然共生型の社会をつくることが「未来に残したい草原の里 100 選」を選定する目的です。

明治大正期には日本国土の 13％程度を占めていた草原が、茅葺きや秣（まぐさ）の需要が激減したことなどから、現在では 10 分の 1 以下に減少しました。草原が失われることは、草原にしか生きられない植物や昆虫が絶滅の危機に瀕するだけでなく、草原に関する地域の歴史や文化、人々の記憶や知恵、絆までが失われてしまうことを意味します。
「未来に残したい草原の里 100 選」は、それぞれの地域が草原を生かした地域づくりを競い合い、その輝かしい成果を顕彰する場とは考えていません。共通の課題を抱える地域が互いの実践やアイデアを学び合い、共に未来へ進んでいくための仲間探しの場でありたいと思います。
みなさんが応募する段階で、誇るべき宝を再発見したり、足りないパーツを認識したりする作業そのものに大きな意味があると信じています。
迷っているみなさん方も奮って「未来に残したい草原の里 100 選」にご応募いただき、わたしたちの仲間の輪に加わってくださることを願っています。

未来に残したい草原の里 100 選 選考委員会
委員長　湯本 貴和



放牧の風景：草原の里「山田牧場」

選考の視点

草原の生態系と、人々が暮らす里との関係性を軸に、以下の観点から選考を行います。



1．草原の自然

人為的に伝統的管理がされてきた、在来草本を主体とする草原であること、草原の景観や特徴的な動植物が把握できる等、里の営みによって維持されている草原の自然について評価します。



2．草原からのめぐみ

現在及び過去の利用が説明できる、今後の利用について方針が決められている、草原の特徴を、現代的な意義も交えて説明できる等、里の営みを通じて受け取っている、草原からの資源や恩恵について評価します。



3．草原を維持するしくみや、価値を享受するしくみの良さ

草原との関わり方が理解され、継続されるしくみになっているか、持続性、公共性の尺度から評価します。管理手法が妥当であること、管理が継続される見込みがあること、動植物についてモニタリングが行われていることなどの、「草原の管理」に関する視点と、草原が生み出す価値が管理者に還元される仕組みがある、社会的な活動と結びついている、経済的な仕組みと結びついているなど「草原の利用」に関する視点から、総合的に評価します。



4．共生型社会の実現に向けた波及効果（ロールモデルとしての期待）

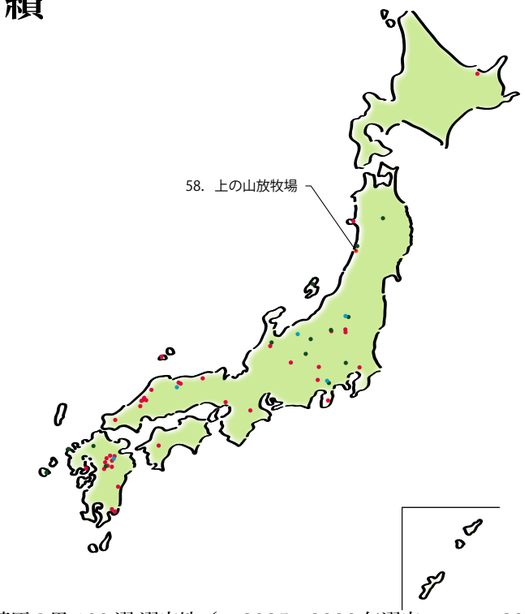
草原の生態系と、利用、管理、保全との相互作用が説明できる、草原に関わる人自身が、草原の価値や生態系サービスを明確に認識しながら活動している等、草原の里が地域や地域外の社会に良い影響を及ぼしている効果。また、今後、影響を及ぼすことへの期待について評価します。



5．草原に対する思いの強さ

管理を継続する意志が明確である、次世代の育成を行っている、情報発信を継続している等、草原に関わっている応募者や関係者の思いの強さ、熱量、行動力を評価します。

これまでの実績



未来に残したい草原の里 100 選 選定地（・2025・2026 年選定、・・・2022 年～2024 年選定）

2022 年より 5 回の選考を経て、全国 58 か所を草原の里として選定しました。
認定された草原の里は、さまざまな方法を通じて、その価値を全国にお伝えしています。

「未来に残したい草原の里 100 選」選定記念フォーラムの開催

認定書授与式および記念フォーラムでの選定地事例発表

未来に残したい草原の里 100 選 ホームページでの事例掲載

選定された草原の里の特徴や魅力、選考委員によるコメントを掲載。
読めば一度訪れてみたくなる情報をお届けします

プレスリリースをはじめ、各種メディア等での PR

環境省記者クラブへのプレスリリースをはじめ、全国草原再生ネットワーク発行のニュースレターなど、草原やそこに関わる団体を広くご紹介していきます。

書籍『未来に残したい日本の草原』への掲載

選ばれた草原の里の素晴らしさを広く紹介するための書籍『未来に残したい日本の草原』を編集・発行しています。今後も順次出版する予定です。（出版・販売：全国草原再生ネットワーク）



選考委員からのメッセージ

草原が失われることは、草原性の動植物が絶滅の危機に瀕するだけでなく、草原に関する地域の歴史や文化、人々の記憶や知恵、絆までが失われてしまうことを意味します。「草原の里 100 選」は、それぞれの地域が草原を生かした地域づくりを競い合い、その輝かしい成果を顕彰する場ではなく、むしろ共通の課題を抱える地域が互いの実践やアイデアを学び合い、共に未来へ進んでいくための仲間探しの場でありたいと思います。



湯本 貴和
選考委員長
京都大学名誉教授

新鮮な風をうけ、深く呼吸していると、まるでその風が心の中にまで吹き込んできて、心のもやもやを溶かしていくように感じます。草原は私にとって最高の風を感じることが出来る場所であり、疲れた心を優しく包んでくれる癒しスポットです。多くの人がそんな草原のある風景に癒され、そこで育まれてきた地域固有の文化や豊かな生態系がまた次世代へとつながっていくように、私も皆様と一緒に「草原の里 100 選」を共に盛り上げ、大切にしていければと思います。



長沢 裕
タレント
日本環境教育フォーラム理事

草原は草の実と草の繊維の生産地。森から出た人類はそれを活用することで衣食住を営み、進化を遂げてきました。草を刈り、使うことで草原は再生され、生活が持続されます。草を使うことをやめれば、草原は放置され消えていきます。草の利用の最大は茅葺きです。茅葺きがなくなって草原は消えました。茅葺きが復活すれば草原も甦ります。その循環の輪を続けましょう。衣食住に草原を生かすことは、昔も今も未来も変わらぬ持続的な暮らしの基盤です。



安藤 邦廣
筑波大学名誉教授

先人たちの営みから、守り育ててきた豊かな草原は、美しい景観を形づくるとともに、生物多様性の保全にも役割を果たしています。しかし近年、維持管理の担い手不足等により、その存続が危ぶまれています。当協議会は、市町村が連携しながら、草原の保全や活用、草原の価値を次世代へとつなぐ取組みを進めています。「草原の里 100 選」事業を通じ、特色ある草原や、それを守り・活かす活動を広く発信し、草原の価値を見つめ直す契機となることを期待しております。



日野 康志
大分県 九重町長
全国草原の里市町村連絡協議会会長

原っぱは東京にもありました。9 月の十五夜の前、ススキを刈りに行った記憶があります。採ってきたツクシが佃煮になって食卓に並んだり、土手で摘んだヨモギから祖母がヨモギ餅を作ってくれたりしたことも思い出されます。かつては江戸川区葛西沖の「水没民地」に生えるアシ、ヨシは重宝されたと聞きました。草地消滅はいまや全国的なトレンド。身の周りにある草や生きものを大切に使う動きを広げてその傾向を止め、暮らしを豊かにしませんか。



河野 博子
ジャーナリスト
自然環境研究センター理事

草原の里 100 選を通じて、草原に関わったことがなかった人が草原の「ファン」になり、そこから草原保全の「サポータ」が誕生し、子どもたちが草原で思いっきり学び「未来の担い手」となってくれることを願っています。そして、草原の里 100 選のご応募を通じて、地形条件や社会条件など立場が異なる地域が集まって、草原保全の悩みを共有し、課題解決に向けて知恵を出し合うことで、地域が持つ魅力を活かした「草原自慢」が各地で広がることを期待しています。



町田 怜子
東京農業大学地域創成科学科教授

日本の草原の起源は、古くは縄文時代頃にまでさかのぼると言われます。古来より人々が自然に手を入れ、世話をする中で作られてきた、人と自然の共生の産物なのです。そこには、新しい時代の持続可能な社会の礎になり得る「智恵」と「技術」と「文化」が根付いています。この草原の価値を受け継いで、地元で頑張っている、頑張ろうとしている人たちを応援し、勇気づける。そんな「草原の里 100 選」でありたいと願っています。



高橋 佳孝
一般社団法人
全国草原再生ネットワーク代表理事

現代人は計算機と同じで、ゼロか一しか許しません。残りはノイズといわれます。自然環境も似たようなもので、住宅地か森かということになって、草原的な環境はどんどんなくなってしまいます。そんな曖昧なもの、いらないよ、どっちかにしてくれ、というわけです。たまにあっても、薬で除草する、草刈り機で刈る。（私たちが顕彰したいのは）草原的な環境を「気持ちがいい」と言う人たちです。



養老 孟司
東京大学名誉教授

未来に残したい

草原の里100選

実施要領

選定対象となる「草原の里」

応募時点で実際に草原が存在している地域に限ります。

応募対象者

日本国内に拠点を置き、草原と関わっている民間団体または地方自治体が応募いただけます。民間団体が応募する場合には、地方公共団体の推薦を得た上でご応募ください。法人格の有無や、営利・非営利（NPO 等）の形態を問いません。但し、公序良俗に反する等、社会通念上不適切な団体は除きます。

応募方法

ホームページから応募フォーマットをダウンロードいただけます。
また、応募に関しての詳細や確認事項、Q&A もご覧いただけます。
https://sato.sogen-net.jp/

主な審査基準

各地に残る「共創資産」を日本全体で共有し、活用していくことで、次世代に希望のある自然共生型の社会をつくるために、複数の観点から、段階的な審査を行います。
審査は有識者で構成する草原の里選考委員会が行います。

応募手数料

無料

スケジュール

毎年 10 月 31 日	応募受付〆切
翌年 3 月	最終審査
翌年 5 月	結果通知
翌年秋	認定証授与式

主 催：全国草原の里市町村連絡協議会
後 援：農林水産省、国土交通省、環境省
協 力：日本自然保護協会、日本茅葺き文化協会、全国草原再生ネットワーク



2026 年 8 月 印刷

全国草原の里市町村連絡協議会

事務局　大分県九重町役場 住民環境課
〒879-4895　大分県玖珠郡九重町大字後野上 8-1
tel：0973-76-3802
E-mail：sogen100@sogen-net.jp
ホームページ：https://sato.sogen-net.jp

表紙写真　春の火入れ：草原の里「北上川河口域のヨシ原」